

南アルプス 登山史を探る

南アルプス芦安山岳館企画展

塩沢 久仙

山梨、長野、静岡にまたがる南アルプスには、本邦第2の高峰である北岳と、赤石岳を南北の盟主とし、甲斐駒ヶ岳、鳳凰三山、間ノ岳、農鳥岳、仙丈ヶ岳、塩見岳、荒川三山、聖岳、光岳らの標高3000m級の山々が連なっています。

雪の北アルプス、雨の南アルプスと呼ばれるように、年間雨量の多い、大きな山容から生まれる、清冽な水は、いたるところに見事な原生林や溪谷美を形成し、キタダケソウを始めとする貴重で美しい多くの高山植物達が咲き誇り、さらに、ライチョウやニホンカモシカ等の野生動物たちが遊ぶ、豊で多様性に富んだ生態系が形づくられています。

100万年も前から活発な隆起を始め、氷河期を経験し、現在でも年間約4mmという世界でもトップクラスのスピードで隆起しながら作り出す様々な自然現象や変化に富む地形、地質は地球の歴史を学ぶ上でも大変貴重です。

山々がもつ様々な資源は、人間がこの世に生まれ生活してゆく上で、欠かすことの出来ない水、食料、燃料、建設資材等の恵を与えてくれると共に、自然が織りなす様々な景観が、豊かな精神活動の舞台を提供してくれています。また、山々の持つ偉大な力に畏敬の念を抱き、神の存在を意識することから山岳信仰が生まれました。下って明治の時代にもたらされた外国人による登山、測量登山を経過してもたらされた日本の近代登山では、冒険、自然科学の研究、文学、絵画、写真等の文化活動が加わり、それらの要素が主体となり現在の登山がなされています。

このような中で、私達人間は、誕生以来山々に対して、どんな考えを持ち、何を感じ、どんな暮らしをしてきたのかを縄文時代から現在に至るまで、南アルプスを中心に繰り広げられた、登山の歴史を切り口に探り、未来に向けた南アルプスの理想的な姿を、市民の皆様や南アルプスを訪れる皆様と共に考えてゆくために、「南アルプス登山史を探る」と題して、平成24年度の企画展を、多くの人々の協力を得て開催いたしております。

この企画展はすでに多数出版されている南アルプス登山の歴史に関する各種の書籍、とりわけ山と嶽谷社版『目で見る日本登山史』をベースに、地元に残る様々な資料を収集し、縄文・弥生の時代から現在に至るまで南アルプスを舞台に繰り広げられた様々な登山の模様や出来事を分かりやすい解説を加えて展示してあります。

北岳の開山は、甲斐国誌に顕われる北岳山頂に祀られていたと言われる「日の神」（実物展示）や小島烏水等の目撃情報から、確証はないものの、恐らく「日の神」（大日如来）が祀られた1795（寛政7）年となり、小尾権三郎による甲斐駒ヶ岳開山より21年、播隆の槍ヶ岳開山より33年も早いこととなります。また鳳凰山は、昭和9年葦崎白鳳会初代会長小屋忠子氏によって発見された「懸仏と古銭」（写真展示）によって、平安時代の修験者によって開かれたと推察されています。

この企画展の展示を進めている最中、知人より宮澤憲著「ヒマラヤ1つの峰の物語」が届けられました。山をこよなく愛し、並外れたバランス感覚を持った岩登りの名手であった宮澤憲は、長野県小谷村に生まれ東京農業大学在学中山岳部に在籍し、1948（昭和23）

年、先輩である、徒歩渓流会の松濤明と北岳バットレス中央稜を下部からの完登を成功させました。松濤明は「風雪のビバーク」の中でパートナーを「M」とだけしか記載していませんでしたが、1983（昭和 58）年、発行の「日本登山記録大成」19 には宮澤憲であることが書かれています。それ以後も宮澤憲は精力的に内外の山に足を運びました。雪山で常に携えていたのは、学生時代自ら仙台の山之内東一郎を訪れて鍛えてもらったピッケルです。C ガリーに残雪のあった当時の北岳バットレス中央稜の初登攀にも使われ、主なき後、妻の美渚子氏によって大切に保管されていましたが、このたびの企画展のために提供していただき、新しい登山史の資料として展示させていただいております。

南アルプスの自然と山々に係わった人々の歴史や文化の発掘と研究、自然保護や安全登山の普及、山を仲立ちとした様々な交流の場を提供することを目的に 10 年前に誕生した南アルプス芦安山岳館の山岳文化活動は決して早くはありませんが、それでも着実に貴重な資料の消失や流出を防ぎ、次代に引き継いでゆく作業が進められています。

【展示会場】



【宮澤憲氏のピッケル】

